

「爆心 長崎の空」 ★★★

2013（平成25）年5月27日鑑

賞＜GAGA試写室＞

監督：日向寺太郎

原作：青木有一『爆心』（文春文庫刊）

門田清水（大学3年生）／北乃きい

高森砂織／稲森いずみ

廣瀬勇一（清水の幼なじみ）／柳楽優弥

山口光太（清水の恋人、医学生）／北条隆博

門田晶子（清水の母）／渡辺美奈代

門田守和（清水の父）／佐野史郎

高森博好（砂織の夫）／杉本哲太

高森瀧江（砂織の母親）／宮下順子

高森美穂子（砂織の妹）／池脇千鶴

高森良一（砂織の父親）／石橋蓮司

2013年・日本映画・98分

配給／バル企画

＜原爆をキーワードに、2人の女性の喪失と再生を！＞

これから夏に向けて、今年も広島・長崎の原爆を思い起こさせる映画が登場してくるだろうが、本作は『爆心 長崎の空』というタイトルから想像するような深刻なドキュメンタリー映画ではない。原爆というキーワードの中で、突然大切な母を失った女子大生の門田清水（北乃きい）と、突然大切な幼い娘を失った母親・高森砂織（稲森いずみ）の2人を中心に、人間の再生を描く映画だ。

『爆心』で07年の第18回伊藤整文学賞、第43回谷崎潤一郎賞をダブル受賞した青木有一氏は、長崎市役所に職員として勤めながら原作を書いたそうだが、長崎出身者だけに原爆やキリシタンへの思いが充満している。ジャズピアニストの小曾根真の印象的な音楽が流れる中、日向寺太郎監督は2人の女性の再生の物語を丁寧かつ優しく描いていくが、私にはちょっと甘すぎるのでは？という感じも・・・。

＜長崎の坂を走る、この女子大生の喪失感は？＞

本作冒頭、急な坂道を必死で自転車を漕いで上がっていく清水の姿が登場する。忘れ物をしたため仕方なく一度家に引き返したわけだが、そこで清水は母親から何を言われても上の空で、メールを打つのに夢中。彼女が坂道の多い長崎の町で珍しく自転車通学しているのは陸上部での鍛錬に生かすためらしいが、さてその効用は・・・？

そんな彼女が、その日の夕方、地元の病院で研修医をしている彼氏の山口光太（北条隆博）とラブホテルのベッドに入っている時に電話がかかってきたが、エッチを優先した清水は電話を無視。そんな風に、清水がその日の日課を終えて家に戻ってみると、母親の門田晶子（渡辺美奈代）が倒れていたから、さあ大変だ。

「あの時私が電話に出ていれば・・・」そんな風に清水が自分を責めたのは当然だが、その後の清水の光太に対する行動や、幼なじみで今はモーターサイクル店で油まみれになって働いている廣瀬勇一（柳楽優弥）との付き合い方（？）は私にはイマイチ理解できない。結局、最後には清水は、父親の跡を継いで田舎の町医者になるつもりだったが、東京に出て行き循環器の専門医になると宣言する光太を捨て（？）、精神錯乱状態にあるのでは？と思われるような行動をとる勇一と生きていこうと決断するのだが、私にはこの清水の再生のプロセスがわかりづらい。自分を責めるのは当然だが、自分の生き方はもう少し自分で積極的に選択して決めていくべきでは・・・？

＜幼い娘を失った、この母親の喪失感は？＞

他方、突然熱を出した幼い娘が看病の甲斐なくあっけなく亡くなってしまったことにショックを受け、立ち直れない母親が高森砂織。夫の高森博好（杉本哲太）もその時に仕事を優先させていたことで自分を責めていたが、こちらは「仕方ない」という割り切りができていた。しかし砂織の方は、「あの子が死んだのは、私が被爆2世だからでは・・・」と考え始めたり、一緒に海で遊んでいた時の楽しい思い出の象徴ともいえるタカラガイが自分だけの目に見えてきたり、とかなり変調・・・。

そんな砂織を心配しながら温かく見守っていた父親の高森良一（石橋蓮司）、母親の高森瀧江（宮下順子）が、本作後半でそれぞれ「ある重要な告白」をするのでそれに注目！これこそ、被爆地・長崎ならではの体験談だ。あの美人女優・稲森いずみもちょっと年を取ったかなと思う面はあるものの、幼い娘を失った母親の喪失感とその再生の姿を好演！

＜2人のヒロインの接点は？＞

本作のヒロインとして登場する清水はもちろん、砂織も戦後世代だから、「あの戦争」も「長崎の原爆」も本来縁遠いはず。しかし本作は、そんな2人を「長崎」「原爆」という2つのキーワードを通じて結びつけていく。

全く接点のなかった清水と砂織が出会うのは「ある偶然」からだが、本作では2人が砂織の娘のお墓の前で語り合う静かな風景が大きなポイントになる。もっともこれは、砂織は幼い娘を失った体験談を、清水は母を失った体験談を一方向的に語るものだから、2人の対話というよりもそれぞれ自分の大切な死者に対して語りかける言葉という感が強い。要するに、人間は大切な人を失った悲しみをその死者と対話することによって癒すことができるし、それを互いに語り合うことによって残されたもの同士が共感することができる、ということだ。そんなストーリー展開を一面ではなるほどと思うものの、私には何となく甘ったるい感が・・・。

＜大人になった柳楽優弥クンのキャラに注目！＞

第66回カンヌ国際映画祭で、是枝裕和監督の『そして父になる』（13年）が審査員賞を受賞。5月27日のこの報道を見てあらためて思い出したのが、是枝監督の『誰も知らない』（04年）で、第57回カンヌ国際映画祭の最優秀男優賞を史上最年少で受賞した柳楽優弥クン（『シネマルーム6』161頁参照）。当時14歳だった彼が、10年後の本作では体格も立派になって汚れ役（？）で登場しているの、彼のキャラにも注目！

映画開始早々に登場するラブホテル内での清水と光太とのベッドシーンはあまりにもおざなりすぎる（？）し、いつの間にかこの光太の存在がなくなってしまうシナリオも少し雑だと思うが、勇一のキャラや勇一の女性に対する反応は興味深い。何ゴトにも真面目で几帳面な長女・砂織の妹・美穂子役として、本作には私の大好きな個性派女優・池脇千鶴が登場するが、池脇千鶴にはエキセントリックな役柄がよく似合う。それをよく知っている（？）日向寺太郎監督は、当初勇一と美穂子の「絡み」を演出したが、ラストでは意外にも清水と勇一が・・・。いくら幼なじみとはいえ、清水と勇一はこれまでの生き方が全然違うし、価値観を共有しているとも思えないため、2人の将来が少し心配だが、それは要らざるおせっかいというもの・・・。

＜喪失から再生へ！＞

今やっと砂織の目の前からはタカラガイの姿が消えたうえ、夫との間にできた次の命を産むことを決意することができたようだ。他方、清水も勇一との結びつきによって、母を失ったことで自分を責める生き方からの脱却ができたらしい。映画的にはこれにてめでたしめでたしだが、さてこれからの2人のヒロインの前途は・・・？

2013（平

成25）年5月30日記